

文苑

漢詩

文科一部二年 安永三千

●苦熱

炎風三伏日 茅舍火雲天 一枕林中臥
清陰急暮蟬

●午睡

竹亭移枕簟 簾外臥松風 日暮酣眠足
覺來氣白雄

●江亭避暑

垂楊江水畔 鷗鷺浴清流 綺席開襟坐
南薰百尺樓

隊の記念祭あり昔は、赤土多き坂道をのぼりく
だりすることの難かりしかど此の頃は白き石段
築かれて詣づる人も多くなりたれど花めづる方
多くなりぬ。

磐梯の朝景色眺めてはその日の空模様ばかり
知りて桑摘む手早やめしを云はれし養蠶業も次
第に衰へ行きて桑畑はきり開かれむね／＼しき
家たち並び舊城の東よりは清朗なる嗽吠の音朝
夕に會津の天地を響かすに至れり。
會津の夏は山國とて暑さ烈しからず三伏の一日
に瀧澤峠を越え行きて猪苗代湖に遊ばんか湖畔
には眼を驚かす樓屋はあらねども山を背にする
茶店三四軒あり、日毎に客も訪れねば湖上に舟
を浮べて魚など漁して生計を營み居るなりされ
ど湖邊は遊ぶがまゝ、浮かぶが儘にまかすなり。
曉早く朝霧湖面を覆ひて湖面依稀としてはてし
なく霧の底ひに緑水ほのかに見ゆる時海知らぬ
山の子等のはるかに渺茫たる海原に擬へて海戀
ふる心を慰めしことをも幾度ぞ。かくて日いよ
／＼高く上りて都會にてはまさに暑さに心倦み

國文

●我が故郷

文科一部二年 佐藤 ヤス

都を北に白河の關を越え行きて越し路にさし
かゝる處にその昔四道將軍の二人なる大彦命と
武淳川別命との會合せられし所とて今尙その名
を稱する會津といふ所あり。これ我が故郷なり。
明治の半頃火を噴きて峯の半を削りたる磐梯山
は巋然として群山中に聳え裾野に周圍十六里な
る猪苗代湖を擁して自らこの地の關門をなせり
中央なる都會を若松と云ひてその東南の蒲生氏
の築きし鶴ヶ城址は昔を語る影とては浮き草
漂ふ濠の水と苔むす石垣とのみなり。市の東北
の飯盛山の櫻爛漫たる頃はひに御花祭とて白虎

はて、文讀むわざも怠りがちなる日盛りに淺瀬
の岩に腰うちかけて此の地の名産なるまくわ瓜
を食うべつ、湖面を渡る涼風に髪撫でしむる心
地よさげに夏こそよけれと思ふなり。されど豊
かなるはこの地の秋なり。會津平野に金波うち
よする頃には柿赤く栗實り山には松茸しめじ初
茸などあさるがまゝに生ひ出づるなり殊に多き
は飯盛山のつづきにてその東北の山々は秋に至
れば山留めをなして自由に登ることを禁じ山上
に小屋ありて藁を商ふなり、商家にては毎年こ
の期に至れば子弟うち連れて此等の山に登り松
樹の下に石など集めて竈をつくりうちつごひて
炊ぎ食ふるをこよなき樂みとなすなり。かくて
會津の空には寒氣の來ることいと早し、鮭食ぶ
る習ひなる惠比須講の頃ははや磐梯の頂きは白
う雪の冠を被るなり、家々にては庭木軒先きな
ごの雪圍ひに忙しく雪交りなる磐梯おろしは日
毎に強うなりゆきていと耐へ難きはこゝ十數日
の間なり。いよ／＼雪降りそめて野も山も家も
庭も深ううづもれ藁靴はきて歩く頃に至れば何

處の家にても室内には炬燵設けられて雪圍ひに
てうす暗けれども落ちつきし住家の如き心地せ
られていとのごやかなり。外には雪降りつづき
て繽紛と窓うつ聲の梢鳴らす北風と交りて聞ゆ
る夜にも内には炬燵圍みし一群の乾柿食うべつ
、夜の更くるをうち忘れて語りつづくる様いと
樂しげなり。

思へば北海の寒地に熊を友とするアイヌも樟
腦茂れる臺灣の山奥に裸跣にて驅けめぐる生蕃
も彼等にとりては都大路の高樓よりははるかに
慕はしき處はそが故郷なるべし。郷人に容れら
れずして郷國に最後の告別をなしたるバイロン
も尙且つ「異國の灰となるとも魂は尙故郷を愛
するなり」と叫びしなり。更に顧ればかの淡暗き
會津の天地は我が最愛の地たるなり、その一樹
一河を夢むと雖も、我にとりては千糸万縷の情
濃かに傍人のはかり知り得ざる愛郷の念は勃々
として湧き出づるなり。
これその自然の美はしきがためなるか、我をば
不、み育てし父母あるが故か、はた我と陸みし

同胞あるが故か。自然の美はしきは何ぞ會津の
みに限らんや、父母去り、同胞に離れし今日尙
愛郷の念禁じ能はざるは何故ぞや。

●硯 (即題)

文科二年 蚊 泉 靖 子

海もあり陸もありて自ら一つの小さき世界を
作りつ其の海は深からねども底には尊き玉もひ
そむべく其の陸は廣からねども千々の言の葉の
出づべきものは硯にあらすやそれ櫻花咲き満ち
たるあした筆さしひたしなば馥郁たる花の香も
匂ふべく皎々たる月の夕墨すり流さばさやけき
かけもやどるべしされば月花のあした夕は更に
て樂しきにつけ悲しきにつけ心一つにあまる思
ひを紙にうつすは此の石のいさをにこそ。

あはれ清き机の上におきて日ねもす硯の小世
界に鑒み海をあさりて玉をひろひ陸を耕して千
々の言の葉を拾ふはいと興ある事にあらずや。

短歌

伊香保にて

柴舟

年暮れぬ雪はだらなる赤城山靜かに見れば涙こぼるゝ
さびしきは冬の山かないはほさへ木さへ群がり立ち立てども
こぼれたる雪の色のみうき出で、夕かげ早き冬の山かな
一人してあらるべしやは雪ぐもり風なき山の空にむかひて
雪近み落ちぬべき葉もおちて來ぬ山の林の年のくれかた
中空に消えたる雪が襟卷のさきに露する朝の湯の谷
あはれなる雪の隠れ家湯の谷の烟の中に羽ならず鳥
夕日さす雪の林のあかるさにおぼえず歌ふ口馴れし歌
風をいたみ日かげもさゝぬ崖下の住ひかなしや冬の山里
湯の烟烟れる雪とみだれあふ冬の谷間を今日も見ることかな